

目的 我々日本人の衣服に対する考え方は、幼少時から徐々に確立してきたものであると考えるとき、現在の子供達の衣生活のありようが、彼らの将来の衣服観形成につながるであろうことは容易に推察される。本報では発達段階にある子供達の衣生活のかなりの部分を占める通学服について、その現状を把握するとともに、その中に含まれる問題点を明確にすることをねらいとする。

方法 ①小・中・高における通学服の現状 ②学校教育における衣生活教育の現状 ③短期大学女子学生の衣生活 以上の3点について、アンケート調査、基礎文献、制服関連業界誌、学校教育カリキュラム等の諸資料をもとに考察した。

結果 小学校の通学服としては都市部では自由服が多くみられるが、郡部、町村部においては制服、または体育用トレーニングウエアー上下がかなり多く採用されている。中学校では規定の制服が多いが、一部登下校にもトレーニングウエアーを採用しているところが見られる。高校においては、最近制服のモデルチェンジ傾向がみられ、DCブランド制服の採用による入学生へのアピールも試みられている。しかし、学校教育の中で通学服に対する教育内容はほとんどみられない。短大女子学生の衣生活にみられる問題点として、服装に対する興味、関心の異常な高さ、経済的負担の大きさがあげられる。また、服について何も考えなくてよいという点で、制服に対する回避願望もみられる。このような現象は子供の発達段階に適応した衣服観が形成されていないことを示唆している。